「対立をこえる」力を育成する新科目「公共」の経済単元開発

２０２１

阿部　哲久

広島大学附属中・高等学校
「中等教育研究紀要」第 68 号別刷

広島大学附属中・高等学校中等教育研究紀要
〈第 68 号　2021〉

「対立をこえる」力を育成する新科目「公共」の経済単元開発

阿　部　哲　久

「対立をこえる力」の育成をめざすうえで，新科目「公共」に期待されるものは大きい。一方で受験対応等のために「公共」の目標が十分に達成されない危惧もある。先行実践によって明らかとなった課題をふまえて，「公共」の授業展開のモデルを開発し実践と評価を行った。

1．問題の所在

VUCA（VOLATILE 不安定，UNCERTAIN 不確実，COMPLEX 複雑，AMBIGUOUS 曖昧）な時代と呼ばれる社会の変化の中で引き起こされる様々な対立が問題となっている。令和４年度からはじまる新科目「公共」は，「社会的な見方・考え方を働かせて現代の諸課題を追究したり解決したりする」ことで，「対立をこえ」て協働し，より良い解決策を生みだしていく力や意欲を育成する科目となることが期待される。

一方で，公表された「公共」の教科書のほとんどは「現代社会」を踏襲した内容・構成となっており，「公共」を実りのある科目にするためには現場の教員による“目標を意識した工夫と実践”が不可欠となっている。多様な教育現場で応用でき，「公共」の目標を達成できる「授業モデル」の開発が求められている。

2．研究の目的と方法

本校では，「対立をこえる」力の育成をめざした公民科の授業開発を行う中で，令和４年度からの新指導要領実施に向けて，新科目「公共」を想定した単元開発と実践研究を 2017 年から行ってきた。そこでは，「公共」の目標である「現実社会の諸課題の解決に向けて，選択・判断の手掛かりとなる考え方や公共的な空間における基本的原理を活用して，事実を基に多面的・多角的に考察し公正に判断する力や，合意形成や社会参画を視野に入れながら構想したことを議論する力を養う」ことに向けた，「公共」の実践上の課題が明らかとなっている。本研究では，これまでの実践の成果と課題を元に授業モデルを開発，実践し，評価を行うことで，広く応用でき，「対立をこえる」力の育成を可能にする新科目「公共」の授業モデルを提示したい。

3．授業（単元）モデルの開発

(1)「公共」の実践から見えた課題

実践を通じて明らかとなった課題の一つ目は，「事実を基に概念などを活用」することの難しさである。社会の問題を扱った論争的な授業では，生徒は通常，まず自分の主張を（直観にもとづいて）最初に持ち，その後で根拠付けを行う（注１）。そのため，トゥールミンモデルを用いて分析をさせたとしても，教師の意図に反して，生徒はモデルを用いて自己の判断基準を再確認し，より強固にすることに留まりがちである。専門諸科学にもとづく社会的な「見方・考え方」を働かせ，直観を覆し，生徒に理論や概念を用いて課題を読み解こうとさせるような授業の工夫が必要である。鍵となるのは“①専門諸科学に基づく社会的な「見方・考え方」の働かせ方である。

二つ目は，「功利主義と義務論の使いこなし」の難しさである。新科目「公共」の大きな特徴に，「選択･判断の手掛かり」となる考え方として，功利（帰結）主義と義務論を基本とした二つの考え方が例示され，それらを使って議論することが示されたことがあげられる。ただし，この二つの考え方は二択ではなく，ある主張と選択判断の手掛かりとなる考え方が１対１の関係でつながっているわけではない（注２）ことは重要である。しかし一つ目の課題ともつながるが，これまでの実践からは，生徒が根拠付けで圧倒的に多く用いるのは義務論「的」な立場，道徳的価値を根拠にした主張であることがあきらかとなっている（注３）。学習指導要領でも触れられているように，功利主義を単なる多数者による少数者の切り捨てであると誤解させないような工夫は必須であるが，義務論と自己の素朴な直観を分けて考えさせるようにする工夫がより重要である。そもそも功利主義とは理性に基づき自己の立場を超えて多様な人たちの幸福について考慮すべきという考え方であった。まずは功利主義的に考えさせ，その上で，

数の暴力に陥っていないか，義務論的に問題が無いか，といった検討をさせることが大切である。そのために生徒に対しては自分とは異なる様々な立場の人たちすべての幸福について検討するよう働きかける必要があるし，そのようなイメージを持たせることが出来るような授業の工夫が必要となる。鍵となるのは“②功利主義，義務論の理解”と“③多様な立場への理解”である。

三つ目は，「合意形成を視野に入れた議論」の難しさである。学習指導要領では公共の目標は「合意形成」ではなく「合意形成を視野に入れた議論」をする力の育成となっており，合意形成そのものが求められているわけではない。また，社会科教育の中で意思決定や合意形成をどこまで求めるべきかという点についてはこれまでも様々な議論がなされてきた（注４）。しかし，これまで先行実践をする中で見えてきたのは，基本的に生徒は社会的な課題の解決に取り組む授業や議論には非常に積極的に取り組むが，合意を視野に入れた議論の質が上がり充実すればするほど，生徒たちに合意の困難さが認識され，ある種の「あきらめ」のような感覚が生じていくということである。社会諸科学にもとづいて事象を分析する中で，唯一の正解が無いことやジレンマの存在を理解させ，その上で多様な立場に立ってより良い結果を求めさせることで，生徒たちはむしろ多様な立場の対立をこえて合意することの困難さに気付くことになる。これは主権者としては重要な気づきなのであるが，懸念されるのはこのことがかえって主権者としての政治的消極性につながるおそれがあることである。越えられない差異を越えて社会を形成するために，現実の困難に直面してなおより良い社会を目指した行動を続ける意欲を育成することは「対立をこえる」力の育成をめざす上での大きな課題である。鍵となるのは“④答えの無い問題に取り組み続ける意欲”である。

(2) 課題をふまえた「公共」の単元構成モデル

新科目「公共」では，内容Ａで１年間の学習を通して働かせる選択判断の手掛かりとなる考え方などを身につけた上で，内容Ｂでは，

法や規範の意義及び役割／多様な契約及び消費者の権利と責任／司法参加の意義／政治参加と公正な世論の形成／地方自治／国家主権／領土（領海・領空を含む）／我が国の安全保障と防衛／国際貢献を含む国際社会における我が国の役割／職業選択／雇用と労働問題／財政及び租税の役割／少子高齢社会における社会保障の充実・安定化／市場経済の機能と限界／金融の働き／経済のグローバル化と相互依存関係の深まり（国際社会における貧困と格差の問題を含む）

などに関わる現実社会の事柄や課題を基に，法や政治，経済領域の知識・技能を身につけること，また「自立した主体として解決が求められる具体的な主題を設定し，合意形成や社会参画を視野に入れながら，その主題の解決に向けて事実を基に協働して考察したり構想したりしたことを，論拠をもって表現すること」が目標とされている。

課題をふまえ，“①専門諸科学に基づく社会的な「見方・考え方」”を位置づけて「内容Ｂ」の基本的な単元構成を構想したものが**図１**である。

Ⅰ，単元を貫く問いの提示（初期状態での議論）
↓
Ⅱ，活用できるようにさせたい理論や概念の学習
↓
Ⅲ，構想と議論（知識の習得や調査活動を含む）
↓
Ⅳ，合意と合意後の検討
↓
Ⅴ，問いへの答え（ふりかえりと展望）

図１　基本的な単元構成

Ⅱで扱うのは学習指導要領の２ 内容 Ｂアの（ア）（イ）（ウ）に，「に基づいて」以降にそれぞれ書かれているような，法・政治・経済の専門領域に固有の理論枠組みや見方・考え方（注５）である。もちろん単元を通じて獲得させたい領域の基礎となる理論と，諸課題に関連した個別的な理論をどう組み合わせるかは，単元の設計によって変化しうる。重要なのは，社会的な諸課題に対して，ただ「選択・判断の手掛かりとなる考え方」などを適用して判断や議論をさせるのではなく，Ⅱに該当するような，ある程度抽象度の高い理論や概念を適用して課題について考察できるようにした上で判断や議論をさせることである。まずⅡを学ぶのではなく，いくつかのⅢ→Ⅳの活動を通じてⅡの理論の獲得をめざす構成なども考えられる（**図２**）。

① Ⅰ→Ⅱ→Ⅲ→Ⅳ→Ⅴ
② Ⅰ→Ⅲ→Ⅳ→Ⅴ
　　└Ⅱ┘
③ Ⅰ→Ⅱ→Ⅲ→Ⅳ→Ⅲ→Ⅳ→Ⅴ
④ Ⅰ→Ⅲ→Ⅳ→Ⅱ→Ⅳ→Ⅴ

図２　単元構成のバリエーション例

判断や議論には当然具体的な知識も必要になる。課題に即してⅢの構成を考えることになるが，中学校までの学習を活用することが重視されている「公共」では，Ⅲは多様なものになるだろう。既習内容

を例示するのみに留める，生徒自身の調べ学習を取り入れる，教科書を用いて知識を学ぶ時間を十分に取る，など多様な授業が考えられる。

新科目「公共」について学校現場では，「社会的な見方・考え方を働かせ，現代の諸課題を追究したり解決したりする活動（学習指導要領）」と，教科書で扱われている「知識の獲得」とをどう両立させるかは重要な問題である。しかし，ⅠからⅤへという基本構成をベースにしながら，Ⅲの扱いを多様にすることで，この問題にも対応が可能になると考えられる。

(3) 課題をふまえた「活動場面」の導入

前述したとおり，ほとんどの生徒は判断や議論の場面でもなかなか自分自身の立場から離れることができない。“②功利主義，義務論の理解”と“③多様な立場への理解”のためには，「内容Ａ　公共の扉」での工夫（注６）とともに，Ⅲの場面に調査活動やロールプレイなどの様々な「活動場面」を導入し，多様な立場に立てるような工夫をする必要がある。また，功利主義や義務論については，年間を通じて扱い，その都度誤った理解があれば指摘するなど継続的な指導を行うとともに，功利主義や義務論といった言葉をそのまま使うのではなく，「まずはなるべく多くの立場の人を考えてより多くの人が幸福になる選択を考えよう，その上で，誰かに負担が偏ったりしていないかチェックしよう」など，分かりやすい表現で投げかけることが必要である。

(4) 課題をふまえた「問い」の構成

社会科・公民科の授業においてはこれまでも，「なぜ」という問いによって社会的事象を探究させて概念的な知識や理論の獲得・活用を目指したり，意見や価値観が対立するような社会的論争問題を題材にして，トゥールミンモデルを用いて事実レベルでの合理的な理由付けと価値レベルでの理由付けを明らかにすることで批判的議論を通じて良い社会を作り出せる力を育成することを目指したりしてきたが，前述したとおり，「なぜ」「どうすればよいか」と問うだけではその理解は問題状況の記述に留まり直観的な判断と直結してしまいがちである。今日的な論争問題の多くは「専門諸科学に問うことはできるが，答えることのできない問題」（注７）であり，どのような意思決定をしても結果として社会のどこかに何らかの負荷がかかることが避けられないような問題である。このような問題に主権者として向き合い，合意の結果を引き受け，改善を続けていくためには，“①専門諸科学に基づく社会的な「見方・考え方」”を働かせて，「答えることのできない理由」を認識した上で，市民と専門家のコミュニケーションを通じた合意を行う必要がある。そこでは「なぜ」の問いは問題の対象だけではなく，常に問題そのもの（対立を引き起こすジレンマの存在や構造）にも向ける必要がある。問題の対象（現実）に対する「なぜ」と問題そのもの（理論）に対する「なぜ」とを意識して並立させ，その上で主張相互の価値観の相違が明瞭になるよう「どうする『べき』」かと問う。そして全ての人が同意できなくても暫定的な合意をまずは作った上で，合意の後も「これからどうしなければならないか」「これから何が必要か」と問う（問い続ける）必要があろう。

従来の合意形成をめざす授業実践では様々な立場を考えた上で「留保条件」を設定しながら合意を形作ることが目指されていた（注８）が，現実にはその作業は際限が無く，直観的な価値の領域では留保条件では乗り越えられない場面も現れる。「合意形成を視野に入れた議論」の難しさはここにある。熟議の意義はもちろん重要であるとしても，延々と議論を続ける（注９）ことで，課題解決への意欲をそいでしまったのでは本末転倒である。また，現実の問題としても，「今」まさに権利侵害を受けている立場の人を置き去りにして議論を先延ばしにすることが望ましいとは言えないだろう（注 10）。“④答えの無い問題に取り組み続ける意欲”を高めるためには，「留保条件→自己の変革→合意」から「合意→留保条件への対応→合意の修正の繰り返し」への転換をおこなうことが必要であると考える。

「どうすればよいか」等（単元を貫く問い）
↓
「なぜ」（理論に基づく分析）
「なぜ」（現実をふまえた分析）
↓
「どうするべきか」（価値観の差異への認識を含む判断）
↓
【暫定的な合意】
↓
「これからどうしなければならないか」（継続的な問い）

図３　問いの構成

４．モデルに基づく単元の開発

(1) 単元の概要

開発した単元（授業）モデルに基づいて「公共」の内容Ｂの経済に関わる項目を単元として開発した。単元計画の作成にあたっては，内容Ｂに例示された 16 の項目については全てを扱うものとされており，内容Ｂ全体を１単元としてもよく，また経済領域を１単元とすることや，領域をまたいでいくつ

かの単元を独自に作成してもよいとされている。16項目をうまく関連付けて単元計画を作成することが求められる（注11)。そこで，本研究では経済領域を一つの単元とし，その中に二つの小単元を置く構成として単元を構想した。

小単元１では，「老後の備えはどうするべきか」を単元を貫く問いとし，項目のうちの４つ（財政及び租税の役割／少子高齢社会における社会保障の充実・安定化／市場経済の機能と限界／金融の働き）を扱うものとし，小単元２では，「私たちは将来どんな働き方をするのだろうか」を単元を貫く問いとして，４項目（職業選択／雇用と労働問題／経済のグローバル化と相互依存関係の深まり（国際社会における貧困と格差の問題を含む）／市場経済の機能と限界）を扱うものとした。小単元１は，**図２**のバリエーションでいうと②と③の折衷型に該当し，小単元２は③に該当するものとなっている。

共通する構成として，単元の最初には，扱う題材に関わってグループで課題などを出し合う時間を設定した。単元を貫く問いを身近な問題として意識させ関心を高めるとともに，生徒の関心や理解をつかむことを意図している。また，単元の最後には単元を貫く問いについてグループ活動をはなれて個人で考えをまとめる活動を設定した（注12)。

(2) 題材選択の理由

図１のⅡに該当する単元を貫く理論や概念として何を選択するかは重要である。

小単元１では，中心的な題材としては「投資」「金融のはたらき」を扱うが，より本質的な理論は「市場メカニズム」とした。「投資」については学習指導要領の改訂によって家庭科でも扱われることになったが，家庭科で扱われる知識の背後にある金融の仕組みをしっかりと理解させることは公民科の役割である。また，老後2000万円問題などをきっかけにして高校生にも投資への関心が高まっているものの，金儲けの方法としての関心しかなかったり，なんとなく危険なものとして忌避していたりするなど，表層的な知識に留まっている生徒が多い状況である。本校での事前アンケートでは，半数近くの生徒は「家庭でまったく投資の話をしない」と回答し，家庭で話をするほど関心が高く，家庭で話をしていないほど投資を危険なものとしてとらえる傾向があることが明らかになっている（注13)。金融は時間を超えて交換の利益を実現し希少な資源の効率的な配分に貢献する重要なしくみであり投資はその一部であることなど，投資商品の特徴やリスクなどに留まらない市場メカニズムの理解にもとづく深い理解をさせることは，公教育としての公民科の授業の責務であろう。例えば，金利が市場における価格と同じ働きをしていることに気づかせることで「必要とされているところへお金が流れるようにする」という金融のはたらきについての理解を深めたり，株価の形成にあたっては「個々人が利益追求のために情報収集を行い割安な株を買い割高な株を売ることによって結果として適正な価格に導かれていく」ということを理解させることで，市場経済に生きる市民として「自分自身も価格を形成し市場に影響を与える存在である」ことの自覚につなげることも可能となるだろう。

小単元２では，中心的な題材としては「比較優位」を扱うこととした。比較優位は経済学の概念の中でも多面的・多角的な考察が可能な題材である。特に①直感に反する，②理論として頑健である，③理論が現実に十分に生かされていない，④ジレンマを内包している，という特徴は「事実を基に概念などを活用させ，より良い選択について考えさせる」題材として適しているといえる。①直感に反する，という点について，生徒の多くは「得をしている人がいれば，必ずその裏で損をしている人がいる。」というゼロサムの感覚を持っている（注14)。しかし比較優位の原理は「経済活動での分業と交換による取引では両方が得をしている」という事実を教えてくれる。ゼロサムの感覚からは，他者への分配を敬遠したり，再分配に必要なはずの成長を忌避したりという行動が導かれやすい。学習を通じて直感とは異なる理論を理解することで，課題解決に向けた思考を広げることができるようになることが重要である。②理論として頑健である，という点については，数学的にシンプルな形で証明可能であることが重要である。生徒は，理論上の望ましい状態を目指しつつ，現実と理論の齟齬の解消に向けて構想し議論する。ちょうど市場経済のめざす状態を理解した上で市場の失敗に対する政府の役割を考えるのと同じ様に，比較優位が活かし切れていない現実に対してどのような対策が必要かを考えることになる。③理論が現実に生かされていない，という点については，例えば比較優位から導かれる「全ての人が分業に参加すればすべての人が豊かになる」はずなのに，特定の人（女性や障害者等）を雇用から排除している事例があげられる。また，「生産性の差が所得の差につながる」はずなのに，非効率な働き方（長時間労働等）が行われている事例もあげられよう。理論からはより良い状態が導けるにもかかわらず存在している諸課題に対して，概念や理論を働かせて構想し議論することが可能となる（第３次が該当)。④

ジレンマを内包している，とは「比較優位による分業と交換が成立するためには等価交換が前提になることから，交換によってどちらも得をすることが出来る代わりに所得格差が生じることを受け容れなくてはならない」ということである。しばしば聞かれるように「豊かな人はより豊かに，貧しい人はより貧しく」なるのであれば，そのような取引は制限してしまえばよいが，実際には「豊かな人はより豊かに，貧しい人は少し豊かに」なる。分業と交換をやめてしまえば「貧しい人は貧しいまま」になってしまうしゼロサムでは分配も進みにくくなるため，分業と交換をしつつ格差の問題に立ち向かう必要がある。所得格差は，交換によって得られた果実をどのように分配するかという社会的な意思決定の問題として捉えることが必要となり，③よりもより困難な合意をめざした議論を行うことになる（第４次が該当）。

(3)「活動場面」の導入

理論への理解をすすめたり，多様な立場に立ちやすくするために，いくつかの活動場面を導入した。小単元１では，二人一組となり与えられた条件の下で交渉して金利を合意する活動を，小単元２では，実際に紙をハサミで切るなどの活動を取り入れた比較優位を体感できるゲーム（注 15）を取り入れた。いずれも理論として学ぶ内容を実際に体験することで理解をすすめると同時に，理論と現実のズレを体感することで思考を深めることができる活動である。さらに小単元１の年金の制度提案を考えさせる場面や小単元２の一部の人が分業から排除されていることへの対策を考えさせる場面では短時間ではあるがロールプレイを取り入れ，多様な立場について考えることが出来ようにさせることを意図した。

5．学習指導案

(1) 単元の目標（学習指導要領より内容Ｂのア（ウ）（経済領域）を単元として作成（注 16））

自立した主体としてよりよい社会の形成に参画することに向けて，現実社会の諸課題に関わる具体的な主題を設定し，幸福，正義，公正などに着目して，他者と協働して主題を追究したり解決したりする活動を通して，次の事項を身に付けることができるようにする。

・職業選択，雇用と労働問題，財政及び租税の役割，少子高齢社会における社会保障の充実･安定化，市場経済の機能と限界，金融の働き，経済のグローバル化と相互依存関係の深まり（国際社会における貧困や格差の問題を含む。）などに関わる現実社会の事柄や課題を基に，公正かつ自由な経済活動を行うことを通して資源の効率的な配分が図られること，市場経済システムを機能させたり国民福祉の向上に寄与したりする役割を政府などが担っていること及びより活発な経済活動と個人の尊重を共に成り立たせることが必要であることについて理解する。
・現実社会の諸課題に関わる諸資料から，自立した主体として活動するために必要な情報を適切かつ効果的に収集し，読み取り，まとめる。
・幸福，正義，公正などに着目して，法，政治及び経済などの側面を関連させ，自立した主体として解決が求められる具体的な主題を設定し，合意形成や社会参画を視野に入れながら，その主題の解決に向けて事実を基に協働して考察したり構想したりしたことを，論拠をもって表現する。
・よりよい社会の実現を視野に，現代の諸課題を主体的に解決しようとする。

(2) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・職業選択，雇用と労働問題，財政及び租税の役割，少子高齢社会における社会保障の充実・安定化，市場経済の機能と限界，金融の働き，経済のグローバル化と相互依存関係の深まり(国際社会における貧困や格差の問題を含む。)などに関わる現実社会の事柄や課題を基に，公正かつ自由な経済活動を行うことを通して資源の効率的な配分が図られること，市場経済システムを機能させたり国民福祉の向上に寄与したりする役割を政府などが担っていること及びより活発な経済活動と個人の尊重を共に成り立たせることが必要であることについて理解している。 ・現実社会の諸課題に関わる諸資料から，自立した主体として活動するために必要な情報を適切かつ効果的に収集し，読み取り，まとめている。	幸福，正義，公正などに着目して，法，政治及び経済などの側面を関連させ，自立した主体として解決が求められる具体的な主題を設定し，合意形成や社会参画を視野に入れながら，その主題の解決に向けて事実を基に協働して考察したり構想したりしたことを，論拠をもって表現している。	・よりよい社会の実現を視野に，現代の諸課題を主体的に解決しようとしている。

(3) 指導計画

			活動場面	図１における項目
小単元１「老後の備えはどうするべきか」(8時間)				
第１次	老後の備えは貯金か年金か株式投資か（単元の導入）	(1時間)		(Ⅰ)
第２次	投資マニュアルを作ろう	(4時間)	(A)	(Ⅱ・Ⅲ)
第３次	年金は持続可能なのか	(2時間)	(B)	(Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ)
第４次	老後の備えはどうするべきか（単元のまとめ）	(1時間)		(Ⅴ)
小単元２「私たちは将来どんな働き方をするのだろうか」(10時間)				
第１次	働き方の課題と将来を考えよう（単元の導入）	(1時間)		(Ⅰ)
第２次	なぜ様々な働き方があるのだろう（比較優位とは何か）	(2時間)	(A)	(Ⅱ)
第３次	分業からの排除を無くすには？	(2時間)	(B)	(Ⅲ・Ⅳ)
第４次	所得格差はどうするべきか	(2時間)	(B)	(Ⅲ・Ⅳ)
第５次	国際社会ではどうだろう	(1時間)	(B)	(Ⅲ・Ⅳ)
第６次	私たちの働く社会はどうなっていくか	(1時間)		(Ⅲ・Ⅳ)
第７次	私たちは将来どんな働き方をするのだろう（単元のまとめ）	(1時間)		(Ⅴ)

※多様な立場に立たせるための活動場面　(A)：ゲーム形式等の活動　(B)：ロールプレイ

(4) 学習指導過程（注 17）

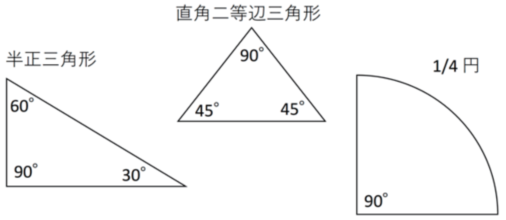
小単元 1

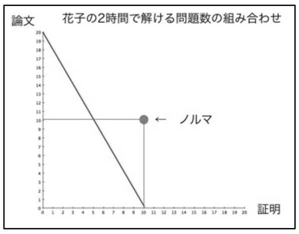
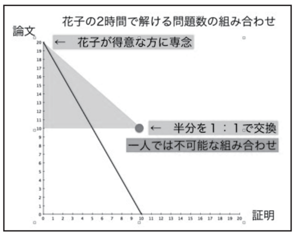
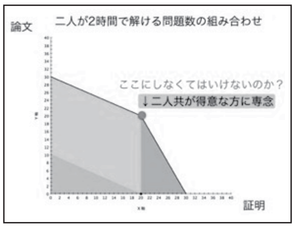
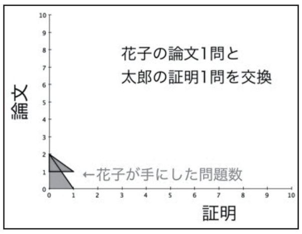
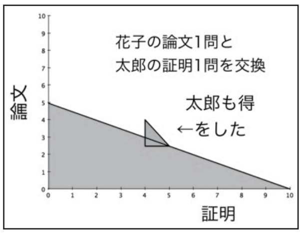
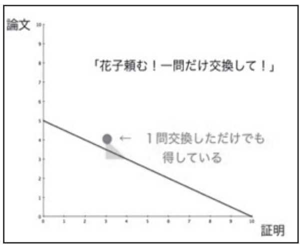
次	主な発問等	・生徒の活動・予想される生徒の反応, ○獲得させたい知識，◇留意点等
第1次	◎自分たちの老後の様子を想像しながら考えてみよう。 ①老後の備えにはどのようなものがあるだろう。 ②どのような選択をすればよいのだろうか，何が問題なのか。	・個人→グループでの話し合いを行う。 ◇話し合いの結果を黒板に書かせ，KJ 法で課題を整理していく。 ◇年金，投資，貯蓄に整理し，リスクや持続性などそれぞれの問題に気付かせる。（老後 2000 万円問題などを例示する。） ◇次時からそれぞれについて検討していくことを予告する。
第2次―1	○老後 2000 万円問題をきっかけに投資に関心を持つ若い人が増えているという。そもそも投資とは何か。なぜ投資をするのか。 ○そもそも投資の学習は必要なのか。 ○この 30 年間で日本以外の国の賃金が 2 倍になっているというグラフを見たことがあるか。 ◎投資の意義やリスクを学習し，「誰でも使える投資マニュアル」を作ろう。 ○投資は金融の仕組みの 1 つでありまず金融を理解することが大切である。 ◎金融の仕組みにはどのような意義があるだろうか。 ○他にどのような例があるか。 ◎金融の仕組みで得られた「家族との時間」「新たな製品」「ワクチン接種」「教育の成果」などに共通するものは何だろうか，話し合ってみよう。 ○金融の仕組みのおかげで必要なところにお金が流れていくはずだが，実際にはどのような困難があるだろうか。 ○ニーズの違いとは何か。 ○ニーズは「長く」「大きく」と「短く」「小さく」に分けられる。どちらが借り手だろうか。 ○ニーズのスレを解消するためにどのような対策が行われているだろうか。 ○マッチングをしやすくしているのが金融市場の存在である。金融市場のしくみはどのように働いているのだろうか。市場の仕組みについて中学校の学習を思い出してみよう。 ○市場では資源の配分の上で「価格」が大きな働きをしていた。では金融市場で「価格」の働きをしているものは何だろうか。	○投資とは将来的に資本を増加させるために，現在の資本を投じる活動である ◇日常的な意味合いと異なることをおさえる ・一部の人がやればよい　等 ◇日本だけがそのままで他国は 2 倍と聞くと驚くが，いわゆる「72 の法則」を紹介し，2 ～ 3％の物価上昇があれば 30 年で 2 倍になること，資産運用でも数％の差が大きな差になることに気づかせ，投資への関心を高める。（実質での差は 2 倍より小さいことにもふれる） ○事例をあげ，住宅ローンでは先に家を手に入れることでマイホームでの家族との時間が得られる，工場への投資でイノベーションがおこり新製品が手に入る，教育投資で将来の暮らしがよくなる，等を確認していく。 ◇活版印刷，蒸気機関，SNS，グラミン銀行，ワクチン債を例示し，金融によって様々なことが実現してきたことに気づかせ，投資が果たす役割，責任を理解させる。 ○「今，資金が得られることが必要」なことである。 ◇金融は「お金の余っている人から必要としている人への融通」と定義されるが，もっと言うと，「今」は使わないけど「将来」必要な人から「今」が大事な人への融通であり，時間を超えた「効率」の実現を目指していることを理解させる。 ・ニーズの違い ・マッチング ・貸倒れリスク ・「長く」「大きく」 ○借り手は大きなお金を長く借りておきたい，貸しては小さな余ったお金を貸したいし，必要な時はいつでも引き出したい。 ○小口の預金を集めて貸し付ける銀行はニーズの違いを吸収しているといえる。証券会社も投資信託のような金融商品を作ることでニーズの違いを吸収する役割を果たしている。 ◇銀行や市場がマッチングの仲立ちをしていることを確認する。 ◇市場経済の学習を想起させる。 ○世の中のほとんどのものは希少性（欲しい人が欲しいだけ手に入れると足りなくなる）があり，どう配分するかという問題が生じる。政府が全てのニーズを把握して配分することは不可能である事から，市場で各人が意思表示をし合って交換を行っている。そこで自分の欲しさを示すシグナルとなっているのが「価格」である。このモデルでは各人の購買力は平等である事などが必要であるため，政府は独占禁止などの介入を行い市場の仕組みがうまく働くようにする。 ○金融市場では「金利」が，価格のような働きをしている。 ◇次時につなぐ。
第2次―2	◎金利はどうやって決まるのだろう。 ○市場での価格の決まり方と働きを確認しよう。 ○リスクの高い人は高い金利を引き受けるというのは直感的に分かるが，需要と供給で説明するとどうなるか。	・需要と供給 ◇市場経済の学習を復習するとともに，需要・供給曲線のシフトについて理解させる。 ○需要と供給のグラフは完全競争市場という特別な前提で，価格だけが変化した時の需要や供給の変化を示している。価格以外の条件が変化すると需要・供給曲線はシフトする。例えばガラケー市場ではスマホの登場で需要曲線が左にシフトし価格が下落する。スマホ市場では需要曲線が右にシフトして価格が上昇する。メーカーはガラケー市場の生産資源を減らしスマホ市場に振り向けるのでスマホ市場の供給曲線は右にシフトし，価格が下がり取引量が増加する。資源が人々の求めているところに振り向けられた（＝効率的に配分された）といえる。 ◇この市場の働きをもとにすると，消費者が環境に配慮した選択をすればそういう商品に資源が振り向けられるという「エシカル消費」や，人々の望む商品の提案を競い合うことが必要であり，競争に負けた時のリスクを軽減し再挑戦を可能にする「有限責任（株式会社）」の仕組みの意義などの理解にもつながることをおさえる。 ○リスクの高い人の場合，供給曲線は左にシフトした形になり，金利は高くなる。

第2次―2	○貸し手（供給）と借り手（需要）の立場で考えて見よう。 ◎隣の人と借り手と貸し手に分かれて利子を決めてみよう。貸し手は老後の資金を増やそうとしている。借り手は信用できる人物で有望な事業に使うお金を借りたい。名目成長率３％インフレ率２％ではどうだろう。 ○世界的な経済ショックがあり，成長率０％，インフレ率−１％になったとしたらどうだろう。 ○利子以外の金利にはどのようなものがあるか。	○貸し手は基本的には高いほど（金利が高いほど）嬉しい，信用できない相手の場合は均衡する金利は高くなる，また，貸し手は他の運用方法（株の配当や売買）で得ることが期待される利益との比較や,返して貰ったときの価値で考える。すなわち「リスク」「経済成長率（景気)」「インフレ率」などを総合的に判断する。借り手も同様であり，同時に私たちは金利によって行動を変える。通常は「リスク」「経済成長率（景気)」「インフレ率」が上がると金利も上がる。 ◇金利が高い理由はリスクが高いということだけではないことをおさえる。 ◇ゲーム形式で行う ◇通常インフレ率を下回ることはないこと，一般的な景気状況と自分の事業の見込みなど，お互いに自分の利益を考えながら決まっていくことに気付かせる。 ◇金融政策の効果の理解にもつながるようにする。 ◇一般的な市場では金利はマイナスになることはほぼ無いこと，マイナスのインフレ率は金利と同じ効果をもたらすことや金融の自由度を制約することになることに気付かせる。 ◇活動を通じて，市場での価格にあたるものが金利である事を理解させる。また，多様な個人が自分にとって最適な選択をするためにこれらの要素を用いて判断していることをイメージ出来るようにさせる。 ○株価に対する配当の割合は配当利回りと呼ばれ，金利として認識される。 ◇株の場合，配当が増えることで利回りが高くなるが，通常そのような株は買われて値上がりするために利回りが高いままにはならないことや，株価が下落したことで利回りが高くなっている場合（その後株価値下がりや配当減が予想される）があることをおさえる。 ◇次時につなぐ。
第2次―3	○国債の金利が話題になることがある。国債の金利はどのように決まるのだろう。 ○ 10 年後に 10 万円を返済することを約束した債券があるとする。今手元の 10 万円で事業をすれば 10 年後までに 10 万円の利益を生む（＝現在の 10 万円は 10 年後は 20 万円になっている）としたら，この債券をいくらで買うだろうか。 ◎投資のイメージと言えば株の売買だが，これまでの学習と株の売買益はどう違うのだろう。 ○「金融の困難」のうち，ニーズの違いやマッチングは，金融市場における金利の働きや金融機関の働きなどによってある程度解消されていることが分かった。では３つ目の，貸し倒れリスクについてはどうだろう。 ○不確実性によるリスクに対してどうすれば良いだろう。 ○情報の非対称についてはどうだろう。 ◎情報の非対称がなぜ問題か，まず非対称が無い場合を考えてみよう。 ◎株式投資を始めるとして，市場で十万円の株を十万円で買うべきだろうか？情報は十分に開示されていて信用できるものとする。 ○なぜ市場の価格が妥当と言えるのか。 ○情報をしっかり調べず周りの人が買っているから，といった投資をするとどんな問題がおきるだろうか。	○貸し借りについては，銀行でローンを借りるような方法の他に，債券を発行することで市場で資金を集めることが可能である。 ○この場合５万円以下（現在価値）で買うはずである。この差額が利子となる。 ○同様に，物価変動がある場合もその分を計算するだろうし，リスクが高ければ買い手が付かないので安くなるだろう。 ◇「リスク」「経済成長率（景気)」「インフレ率」がここでも関わってくることをおさえる。 ◇先進国，新興国，途上国などいくつかの国の国債金利を紹介し理由を考えさせる。 ○株の売買は常に逆の立場の存在があるため利益の裏には損失があり，全体としての富は増えていない（GDP にも算入しない)。そのため「投資」では無く「投機」とよばれる。 ◇ FX などの証拠金取引のリスクについてもふれる。 ○本来的な意味での不確実性によるリスクと，情報の非対称のような市場の失敗が存在する。 ○不確実性に対しては，担保が解決策の一つであるが効果は限られる。分散投資や,銀行のしくみも不確実性に対する解決策である。 ○情報の非対称は市場の失敗の一つである。 ◇独占，外部不経済といった市場の失敗について復習し，情報の非対称について理解させる。 ○情報が十分に開示されている企業であれば十万円で買うことは妥当である。 ○売買益をめざす投資家は割安な株を見つけることで利益が上がるので割安な株があれば買う→値上がりし妥当な価格に落ち着く。割高でも同じ。市場には適正な価格への調整機能（価格発見機能）がある。 ◇ここでは投機家も役に立っていることにふれる。 ○本来の価値を大きく上回る値段がついてしまう「バブル」やバブルの崩壊で経済全体にダメージを与える事になる。 ◇日本のバブル経済やその後の不良債権問題，貸し渋りなど，金融の機能が低下したことを紹介する。 ◇「投機」を行っている人を含め，自己利益のための市場参加者が適正な価格を維持する働きをしている＝市場の機能をになっていること,投資をすれば自分もその一員になること,に気付かせる。 ◇次時につなぐ。
第2次―4	○情報が大切である事が分かったが，ではどのような対策が必要だろう。	○法的なしくみや，証券取引所の上場審査などがある。情報生産活動は機会費用が大すぎるとそもそも貸さなくなってしまうため市場での会計情報の公開が必要である。 ◇会計不正が問題になった事例を紹介する。 ◇投資家として個人も会計情報を知ることが重要であることにふれる。

第2次―4	◎会計情報とはどのようなものだろう。 ○年収10億と資産100億はどちらがお金持ちか。 ○フローとストックであり単純に比較はできない。 ○企業の損益計算書を見てみよう。 ○ストックを表す貸借対照表を見てみよう。 ◎貸借対照表でメルカリとブックオフを見分けてみよう ◎投資をする上で留意すべきことは何か。学習を整理しよう。 ◎投資家としてどのような事に気をつけるべきか，投資家の権利と責任をふまえてマニュアルを作成してみよう。	・年収，資産，わからない ○年収10億円はフローでありある一定期間内の動きを表す。資産100億円はストックであり，ある一時点の状態を表す。比べられない別のものだがどちらも重要である。 ○家計簿や生徒会決算でなじみのある形式だがこれはフローを表している。 ◇貸借対照表の概要を簡単（資産と負債，運用状況を表している程度）に説明する。 ・固定資産の少ない方がメルカリである。 ◇事例を元に会計情報から企業の様子が分かることを理解させる。 ○私たちは自らの資産を将来のために投資し，利益を受け取ることができる。＝投資を受けた人は，投資を受けることで企業活動を行い利益を得ることができる。 ○ ESG投資など，投資をすることで私的利益を満たしつつ，社会貢献をすることもできる。（グラミン銀行，ワクチン債など） ○積極的な情報生産活動により利益を得ることもできる。ただし価格発見機能を担っており，皆が買っているから，ただ値上がりしているから買う，といった行動はバブルをまねき経済全体にダメージを与える可能性もある。 ◇パフォーマンス課題としてマニュアルを作成させ，授業を経て投資家（株主）として市民の権利と責任をふまえた回答になっているか評価する。
第3次	◎投資を行うにしても多くの人にとってセーフティーネットとなるのは年金である。少子高齢化が進む中で年金は持続可能なのだろうか。 ○持続性を高めるために給付を減らすことは可能だろうか。国民皆保険皆年金の福祉は手厚すぎるか。 ○中負担中福祉という感覚はどこから生まれたのか。 ○このような仕組みはどのような影響を生むか。 ○なぜこのような仕組みになっているのだろう。 ○諸外国より大きかった支出は何か。 ○給付を減らすことは大変そうだ。 ○持続性を高めるために負担を大きくすることは可能だろうか，どのような方法があるだろうか。 ○日本の社会保障制度の特徴は何か。 ○現役世代は負担ばかりで年金は払っても得にならないというのは本当か。 ◎年金制度の持続性を高めるためにどのような対策を行うべきだろうか，提案しよう。	○データからは日本の社会保障は給付も負担も大きくはない（低負担低福祉国に近い）ことが分かる。 ◇福祉国家レジーム論を紹介し，「△負担△福祉」とは異なる見方があることに気付かせる。 ○社会保障支出が「全員に関係のある」年金と医療に偏ってきたことが理由の1つとしてあげられる。 ◇高福祉国では現役世代向け給付の割合が大きいことに気付かせる。 ○特別な人を助ける制度（生活保護など）へのスティグマを生みやすい。 ○ 90年代までは日本では公共投資に大きな支出が割り当てられていた。 ◇ 70 ～ 80年代諸外国が福祉国家からの転換を図る時期に福祉国家を形成しなければならなかった日本では公共事業による再分配とジェンダー化された家族（標準家庭＝男性稼ぎ主モデルにもとづく女性による家庭内での福祉負担）によって福祉を代替する，いわゆる「日本型福祉社会」が形成されたことで，少ない社会保障支出が可能になったことをおさえる。 ○消費税，所得税，社会保険料などの特徴についておさえ，多様な税の在り方があることに触れる。 ◇税制度について公平・中立などの視点から検討させる。 ◇消費税は逆進性があるが比例的でもあること，保険料は現役世代が負担することになることや性質上負担率が一定以上に上げられないことをおさえる。 ◇現在は社会保険中心の制度であることをおさえる。 ○「豊かな人から困っている人へ」ではなく，豊かとみなされるカテゴリーから弱いとされるカテゴリーへ（現役世代から高齢者，都市から地方等）の再分配になっているという指摘がある。 ○ 40年積み立てて20年受け取ると考えると，保険料の2倍の給付を受けることになるが，国民年金では約4倍を受け取ることが出来，その差は税から補填されている。 ◇一定の利率で複利運用ができれば4倍になるが，リスクを負えない人にとって年金は重要な意味があり，制度として大切であることをおさえる。 ◇現行制度をふまえて具体的に考えさせる。 ◇ロールプレイを行い多様な立場に立って考えさせるようにする。 ◇考える際は，国民（基礎）年金と厚生年金等の違い等についても明確にするようにさせる。
第4次	◎老後の備えはどうするべきだろう。第4次で作成した投資マニュアルをベースに，誰もがが使える「老後の備え心構え帳」を作ってみよう。 ○個人で整理して全体に発表しよう。 ○他の人の考えを聞いた上でまとめをしよう。	◇これまでの学習をふまえ，経済，法，幸福，正義，公正などに着目させ，投資や金融，年金制度の意義や課題，自分だけに留まらない経済社会の一員として考えるようにさせる。 ・（共有する。） ◇具体的な現実社会の課題をふまえ，経済の理論や概念を働かせて考察し，自らの行動と結び付けて構想するよう指導する。

小単元２

次	主な発問等	・生徒の活動・予想される生徒の反応， 〇獲得させたい知識，◇留意点等
第1次	◎自分たちの将来働く様子を想像しながら考えてみよう。 ①「働く」事に関わって，現代の課題をあげてみよう。 ②将来，どのように変化しているだろうか，想像してみよう。	・個人→グループでの話し合いを行う。 ◇話し合いの結果を黒板に書かせ，KJ 法で課題を整理していく。 ※本実践ではどのクラスでも「平等（男女等権利に関わるもの）」「格差（賃金，非正規等経済に関わるもの）」「労働条件（ハラスメント，労働時間等）」「変化への対応（少子化，AI 化等）」に集約された。 ◇次時から，課題について考えるための理論を学ぶ事を予告する。
第2次―1	◎なぜ様々な働き方があるのだろう。 〇ゲームをしてみよう。 ・４人グループを 10 作ります。端数が出たところはグループに入って応援団をしてください。 ・３つの図形を白紙から切り取ってから「ABEABE」と書いてください。 ・使って良いものは，ペン，配付した文房具，白紙のみです。 ・紙を重ねて切るのはルール違反です。 〇一回戦です。 ・他の人と協力せずに，自分の持っているものだけで３つの図形をできるだけバランス良く，正確に作って下さい。 〇二回戦です。 ・直角二等辺三角形の定規を持っている人は直角二等辺三角形のみを作り続けて下さい。半正三角形の定規を持っている人は半正三角形のみを作り続けて下さい。分度器を持っている人は１／４円を作り続けて下さい。はさみを持っている人はグループの人が書いた図形を切り続けて下さい。 ・１回目と同じように，できるだけ正確に切り取ってから「ABEABE」と記入して下さい（誰がどの図形に書いても良い） ・全ての図形をバランス良く作って下さい。 〇三回戦です。グループのうち２つを解体します。5 人グループを作って下さい。端数が出たところは応援団をして下さい。 ・新しく加わった人は骨折して利き腕が使えないこととします。 ・誰がどの文房具を使うかは自由に役割分担を変えて良いこととします，生産量がなるべく多くなるように役割分担をして下さい。（３分相談の時間を取ります） ・活動は今までと同じです。なるべくバランス良く作成して下さい。 〇結果を確認してみよう。 〇三回のゲームではそれぞれ何が違ったのか，話し合って整理してみよう。	◇各グループに，三角定規２種，分度器，はさみ，ペン，紙を配付する。 ◇スライドやプリントを用いて分かりやすいように説明を行う。  ・個人の持ち物で使って良いのは原則下書き用の鉛筆のみ，一回戦では，定規の人は定規で切る作業も行う（自給自足の再現）。 ・一・二回戦では文字記入用のペンのみ共有できる。 ・三回戦ではペンも共有不可。 ◇三回戦では，利き腕以外の手でおさえる，他の人が手伝うなどはルール違反であることを伝える。 ◇自給自足，分業の違いであること，三回戦は分担でハンデを乗り越えることができたかがポイントである事をおさえる。◇比較優位の理論通りには行かない場合もあるが，その場合も次時以降で現実に起こりうる問題と結びつけて説明するために，それぞれどういうことが起こったのかを確認しておく。 ※通常２回戦よりハンデがあっても３回戦の生産は増加する。稀にルールを理解せずハンデのあるメンバーに作業以外を割り振る班があると生産がより増えてしまうが，理論通りにいかないと捉えさせるのではなく，現実の職場での難しさとして第２次の最後の討論に生かすようにさせる。
第2次―2	◎分業でなぜ効率がよくなるのだろう。 〇ものがたりで考えよう！ ・あなたはアルバイトをはじめました。のし袋を折って文字を書き入れる仕事です。あなたは１時間で 20 枚の袋を折るか，10 枚分の文字を書くことが出来ます。 ・ある日，一緒にバイトを始めた花子さんと話していると，彼女は１時間に 20 枚を折り，15 文字を書けることがわかりました。 〇あなたは何と言ったでしょう？ 〇答えは「交換しよう」です。 ・次の日，あなたは１時間で折った 20 枚の袋を花子の所へ持っていくと，花子は 13 枚の文字入り袋をくれました。 〇あなたは得をしましたね，でもなぜ花子はそんな交換をしてくれたのでしょう？ 〇花子の立場で考えてみましょう。 ・花子は１時間に 15 文字書けるので，13 枚書くためには１時間かかっていません。ところがあなたからは 20 枚の袋をもらいました。20 枚作るのには花子も１時間かかるので１時間かけずに作ったもので１時間分の成果を手に入れたことになります。 〇花子は得をしましたか，損をしましたか？ 〇二人とも得をしていますね，どうやら交換で当事者のどちらも得をすることがあるようです。なぜそんなことが起こるのか，別の物語を見てみましょう。 ・太郎は国語より数学が得意です。１時間に論文問題なら５問，証明なら 10 問解くことが出来ます。 ・花子は数学より国語が得意です。１時間に論文問題なら 10 問，証明なら５問解くことが出来ます。 ・今日は論文 10 問，証明 10 問の宿題がでました。	◇同じ作業を繰り返すことで早くなるだけではないことにふれる。 ◇非現実的な設定であるが趣旨を汲んで考えるよう自分でツッコミを入れながらおもしろく指示する。 ・すごいね，僕のもやって，等 ◇ここではくわしく説明せず物語をつづける。 ◇１時間の労働で自分なら１時間で 10 枚しかできないはずの文字を 13 枚手に入れたことを確認する。 ・友だちだから，好きだから，等 ◇生徒にとっては直感に反することなので丁寧に説明する。 ・得をした。

第2次―2	○太郎は何時間かかりますか？ ○花子は何時間かかりますか？ ・午後８時に塾の自習室で二人は出会いました。 　花子「まったく最悪の誕生日，彼とデートするつもりだったのに門限の11時まですっと宿題だわ」 　太郎「僕だってそうさ，10時から大好きなアニメを見ながらTwitterで盛り上がるつもりだったのに！バルス！」 ○図で確認しよう。 ○どうしたら良いだろう，まわりの人と相談してみよう。 ○ものがたりの続きを見てみよう。 ・太郎は２時間ずっと証明を解きます。20問の証明ができました。 ・花子は２時間ずっと論文を書きます。20問の論文ができました。 ・「論文10問と証明10問を交換しようよ」 ・あら不思議，二人の手元にはそれぞれ論文10問と証明10問が！ ・二人は残りの１時間，デートとアニメを楽しみましたとさ，めでたしめでたし。 ○図で見てみよう。 ○協力すると一人では手に入らないものが手に入るんだね，しかも二人とも。 ○一番得なのはどういう時だろう。 ○図で見てみよう。 ○問題数が多いほど良いと考えるなら得意なことに専念した方が良いと言うことだね。 ○数学も国語も得じゃ無い人はいますか？そういう人は出番はないのかな，次の物語を見てみよう。 ・花子は事故にあってけがをし，ギプスのせいで１時間に証明１問，論文２問しか解けなくなってしまった。 ・塾で出会った太郎と花子はどういうだろう？ ・答えはやっぱり「交換しよう」です。 ○図で見てみよう。 ○こういう質問が良くあります。「得意な方をしないといけないの？」 ○図で見てみよう。 ○ここで示されているのは，苦手なことに使う時間を得意な事に使えばより多くのことができるという事実があるということ，それを利用してどっちも得だと思えば交換したら全体としても豊かになっているよ，という話だね。 ○ここまでをまとめると， ・交換は，どんなに生産性に差があっても成立し，交換によって生産性の低い人も得をすることができる。 ・しかも，得意さに差があることがポイントだとすると，グラフの傾きが違う人同士なら誰でも得な交換ができることになる。 ○「なぜ様々な働き方があるのか」という問いにどう答えるか。	・３時間 ・３時間 ◇直線の生産可能性グラフを用いて２時間ではどんなに「努力しても」絶対に宿題が終わらないことを確認する。  ・手分けする，誰かに頼む，など ◇クラスごとに違う問題が出ていて写すことはできない設定であることを説明する。  ◇図を使って，一人では絶対に手に入らない量の問題が手に入ったこと，それも二人ともに手に入ったことを確認していく。 ◇生徒にとっては直感に反することなので丁寧に説明する。 ◇三角形が移動する図を使って得意な方に完全特化した時が得られる問題数が最大になることを確認する。 ◇自分の得意なものを担当して，相手の得意なものと交換するとお互いに得になる（少ない労力で多くを手にすることが出来る）を確認する。機会費用の概念を用いてもよい。  ◇生産性に差があっても交換すると自分一人では解けない問題数が手に入ることを説明する。   ◇一問だけ交換しても得になっていることを確認する。 ◇多様な人たちが集まることに意味があることをおさえる。  ○自給自足の10人からなる社会より多様な人たちが分業している10人からなる社会の方が豊かになれるから。しかも各人の生産性の差は関係ない。
第3次	○社会のみんなが分業に参加した方が豊かになれるはずだが，にもかかわらず現在の社会で誰かを分業から排除している例はあるだろうか？ ◎<u>どのようにしたらすべての人が分業に参加（社会参加）できるようになるだろうか。変化すべきことを考えて提案してみよう。</u> ○女性の雇用を妨げている理由は何だろう？	・女性，障害者などへの差別がある。 ◇第１次で課題としてあげられた「平等」に関わることに気付かせる。 ・（ロールプレイを行った上で原因を考える） ◇ロールプレイを行い多様な立場に立って考えさせるようにする。 ◇前時のゲームを想起させ，一人が全てをやってしまおうとしたり，役割分担によってボトルネックになってしまうこと，それでも生産は増えていること，など現実に直面する問題に気付かせる。 ◇部分最適と全体最適などの概念を提示する。

第3次	○現在はどのような対策が行われているだろう？ ○立法などにもかかわらず平等が実現しないのはなぜだろう？ ○どうしていくべきだろうか？提案しよう ○障害者の雇用を妨げている理由は何だろう？ ○現在はどのような対策が行われているだろう？ ○立法などにもかかわらず平等が実現しないのはなぜだろう？ ○どうしていくべきだろうか？提案しよう。 ○現実性よりも可能性を考慮して考えよう。	○男女雇用機会均等法，男女共同参画社会基本法，労働基準法（産休，同一賃金），育児・介護休業法の施行，子ども園や保育園の設置などの対策が行われている。 ◇現行制度をふまえて具体的に考えさせる。 ◇ネットで問題について調べさせても良い。 ◇困難な問題であるため容易に答えは出ないはずであるが，これから考えていくことが重要であることをおさえる。 ・（ロールプレイを行った上で原因を考える） ◇女性と同様の手順で議論させる。 ○障害者雇用推進法，障害者年金，障害者差別解消法などがある。 ◇現行制度をふまえて具体的に考えさせる。 ◇ネットで問題について調べさせても良い。 ◇現実的な壁の存在を認めつつ，工夫や協力，テクノロジーによって壁を越える方法を考えるようにさせる。（パリパラリンピックの告知動画などを示す。） ◇制度としては経済的に機能するように工夫されているが雇用が進んでいないことをおさえるとともに，「障害の社会モデル」の考え方（障害と認識されるかどうかは社会の側の受入体制で決まる。例えば裸眼視力が低い人もコンタクトレンズがあることで障害と意識せず暮らしている）を紹介し，「合理的配慮」の意義を理解させる。 ◇現実に解決が中々進まない問題であるため容易に答えは出ないはずであるが，将来の望ましい変化へのビジョンを持ち，働く中で課題に直面した時活かせることが重要であることをおさえる。
第4次	○前回まで，分業で誰もが豊かになれるという話をしたけど，例は物々交換だった。お金をはさんでもうまくいくのか考えてみよう。 ○図で見てみよう。 ・前回の話で花子が交換する論文についやしたのは 30 分，花子の時給が 1000 円なら 500 円だね。（証明だと 1000 円） ・太郎も時給が 1000 円だとすると証明 1 問は 100 円，論文でも 200 円になる。 ・これでは太郎が花子から論文を買うことはないね。 ・証明も論文も 100 円と決まっていたらどうだろう。 ・それなら交換が起こりそうだけど，この時花子の時給は 200 円，太郎は 1000 円。 ○所得格差はありのままに受け容れるべきか？ ○どのような問題だろう。 ○所得の再分配には合理性がある。ただしどのような制度にすべきかは社会的に決まる。 ◎所得の再分配制度は「どうするべき」だろうか。具体的な再分配政策を提案しよう。 ○現状にはどのような問題があるだろう。 ○今の自分を基準に考えてしまうのでロールプレイをして課題を明らかにしよう。 ○現行制度や行われている議論にはどのようなものがあるか。 ○立法などにもかかわらず格差が問題になるのはなぜだろう？ ○望ましい制度を提案しよう。 ○合意をしよう。 ○選択した政策が採用された場合，残された負荷に対して「これからどうしなければならないか」考察しよう。	○比較生産費説は，賃金格差を受け容れることによって成り立っている。 ・受け容れるべき，受け容れるべきで無い　等 ○分業と交換の利益を享受する社会では生産性によって所得格差が生まれる。ただし高い所得は分業相手の存在によるものであり，個人の能力や努力「のみ」によるわけではない。生産性が低いことで生活が出来ず分業に参加できなければ高い所得も維持できない。 ◇生産性の高い人の所得が高いのは自分より生産性の低い人を含めた分業の成果であることに気付かせる。 ◇生産性によらない処遇の格差による所得格差があるとすればそれも問題であることをおさえる。 ◇導入での課題意識を想起させる。 ・（ロールプレイを行った上で原因を考える） ◇ロールプレイを行い多様な立場に立って考えさせるようにする。 ○累進課税制度，生活保護，最低賃金法，労働基準法，有期雇用労働法（同一労働同一賃金）などの対策が行われて，負の所得税やベーシックインカムなどの議論もある。いずれも様々な課題がある。 ◇現行制度をふまえて具体的に考えさせる。 ◇まずはより多くの人の幸福をめざすこと，その上で義務論的なチェックを行うようにさせる。 ◇直ちに実現可能で無くてもよいことを伝える。 ◇ネットで問題について調べさせても良い。 ・各グループの結論を黒板に掲示し共有し，多数決でクラスとしての意見を決定する。 ◇困難な問題であるため容易に答えは出ないはずであるが，これから考えていくことが重要であることをおさえる。 ◇誰にも負荷の無い選択肢がないこと，そのことを引き受けて合意を行うがその後も継続して考えていくことが重要であることをおさえる。
第5次	◎比較優位の見方を国際社会に転用して考えるとどんなことが見えてくるだろう。 ○例えば GATT などの基本ルール，南北格差はどのように説明できるだろう。	○比較優位の原理の意義と課題を国家間の関係に転用して考えるなら，多様性を活かした国際分業が進むことで豊かさが増すが，一方で成長の度合いには格差が生じる。現在の世界は自由貿易を基軸として分業の利益を分け合おうとしているが南北格差も生じている。 ◇国際貿易では，生産性だけではなく，土地，労働，資本などの偏りによっても比較優位が生じるとされること，国際貿易は複雑であり理論と異なる現象も報告されていることをおさえる。

第 5 次	○前次までの学習を活かし，現在の社会で起こっている様々なトピックについて考察し説明してみよう。 ○発表する。 ○整理しよう。 ○近年，自由な貿易の拡大にしたがってグローバル化が進行する中でグローバルバリューチェーンが拡大してきたことが関わっている。 ◎安全保障や災害への対応のためにグローバルバリューチェーンの拡大を見直す動きもある。見直すべきか，見直さない方が良いか，議論しよう。	◇グループごとにトピック（貿易摩擦，新興国の成長，半導体不足，EU などの地域統合，TPP などの多国間協定）を指定し，調べて整理させるようにする。 ◇理由，意味，影響について整理させる。 ・（共有する。） ◇比較優位よりも「貿易黒字が是」という錯覚が根強いこと，合意の難しい多国間からまず２国間，リージョンへと自由貿易の枠組みが進んできていること，理論にはあてはまらない形での成長がおこっていること，自由貿易地域や外国投資，グラビティモデル，などにもふれる。 ◇途上国の参入のしやすさ，相互依存の強まり，国際協調の進展，多国籍企業の影響力，「負の価値」の移転，安全保障や災害対応など，様々な影響を例示する。 ◇国際社会において公正かつ自由な経済活動を行うことや，国際協調の意義などについて考えさせる。
第 6 次	◎私たちの働く未来の社会はどうなっていくだろうか。視点を広げて社会の変化を予想しよう。 ○産業構造の変化，フィンテック，IoT，ビッグデータ，AI，キャッシュレス化，仮想通貨，とは何か，どのような意味がある（社会に変化をもたらす）のだろう。 ○発表しよう。 ○私たちの働き方はどうなっていくだろうか，働き方の変化を予想しよう。	 ・（グループで話し合う。） ◇グループごとにトピックを指定し，調べて整理させるようにする。 ◇前次までに学習した分業やグルーバル化の意義と課題をふまえて，それぞれの技術革新の持つ意味について考察させる。 ・（共有する。） ◇社会の変化を踏まえつつ，これまでの学習をもとに「望ましい在り方」について考えるようにさせる。
第 7 次	◎私たちは将来どんな働き方をするのだろう。自分が働く時代に変えたいことを提案し，そこでの自分の働き方を構想しよう。 ○個人で整理して全体に発表しよう。 ○他の人の考えを聞いた上でまとめをしよう。	◇これまでの学習をふまえ，経済，法，幸福，正義，公正などに着目させ，働く意義や課題について広く説明するようにさせる。 ・（共有する。） ◇単元を貫く問いに対し自らの考えをまとめさせる。 ◇具体的な現実社会の課題をふまえ，経済の理論や概念を働かせて考察し，自らの行動と結び付けて構想するよう指導する。

６．実践の様子

2021 年の 10 月～12 月に高校１学年５クラス（205 名）を対象に実践を行った。時間数の関係から，今年度は小単元１では第２次のみ，小単元２では第１次から第４次までのみの実践となった。そのため報告は実践を行った部分に限定されたものになるが，これまでの実践から明らかになった三つの課題をふまえた“①専門諸科学に基づく社会的な「見方・考え方」”を働かせ，“③多様な立場への理解”をすすめ，“④答えの無い問題に取り組み続ける意欲”を高める工夫を中心に，実践の結果を示し評価と考察を行いたい。特に三つの工夫を総合的に行った小単元２について，以下に実践の様子を記す。

小単元２の第１次では導入として，生徒に現代の働き方の課題や将来の変化を自由に考えさせた。4 人程度のグループで話し合って黒板で共有するようにした。高校１年生５クラスのいずれでも男女間の格差やハラスメント，正規非正規格差，少子化やＡＩとの競争などの変化などがあがった（**図 4**）。

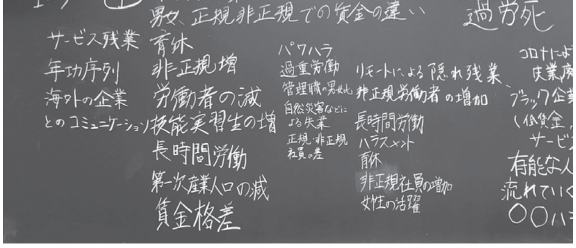


図 4　生徒の課題認識例

ＫＪ法によって整理して，「平等（権利）」「格差（所得）」「労働条件（ハラスメント・長時間）」「変化への対応（少子化・ＡＩ化）」の４項目を生徒の関心として抽出した（便宜上，権利の面での平等の問題を「平等」，経済・所得面での平等の問題を「格差」と表現した）。その上で，これらの事柄について授業を通じて明らかにしていくという見通しを示した。これによって生徒自身が課題を把握し自分の中にある問題意識を確認することで関心や切実性が増すとともに，漠然と考えていた問題を整理して示すことで理論的な枠組みと結びつけやすくするという効果が期待できる。本実践においても第２次以降で理論を用いて現実の諸問題を分析する際に「これは最初に君たちから出てきた『権利』に関わる問題だね」など，確認をすることで難しい理論を用いた活動の意味を再確認でき，学習意欲を高めることが出来た。

第２次では，直感的では無い理論の理解を助けるために，比較優位を体感できるゲームを行った。このゲームでは，理論通りのことも起こるが，現実の社会と同じように理論通りにならないことも起こるところに特徴がある。このことが現実の社会の課題について構想し議論する上でヒントになるのであ

る。生徒は熱中してゲームに取り組み大いに盛りあがった。理論通りの結果になったグループやそうならなかったグループ，勝負にこだわりすぎてルールの確認が甘くなり結果的にルールを破ってしまうグループなどもあった。そのどれもが現実の問題について考える手掛かりになることから，ふりかえりの後，次時で理論を学ぶことや，理論通りではなかった部分も考える上で大切になることにふれ，その上で，ものがたり形式で比較優位の理論の説明を行った。

第３次では，①明らかとなっている理論上のより良い状態をめざすべきであること，②実際には理論通りの状態が実現していない場合には理論を生かしつつ望ましい状態に導く政府の役割が必要であること，③そのためには現実社会で壁になっていることを考えた上で解消する方法を考える必要があること，をゲームをふりかえらせながら提示し解決策を考えさせた。その上でロールプレイを取り入れて，出産と仕事を両立したい女性，障害のある人，男性社員，経営者，政府の人，などの役割演技によって多様な立場に気付けるようにし，部分の最適化にこだわると全体の最適化ができなくなることなどを示した。また，あえて議論を活性化するために反論を行う「悪魔の代理人」役を加えた（注 18)。生徒は熱心に楽しんでロールプレイに取り組み，ゲームでの経験も生かしながら「理論から導かれる望ましい状況」と「理論どおりに行かない現実」をふまえて，より望ましい状況を実現するための方法を考えようとしていた。１学期に学習した「ジョブ型雇用」などの概念を用いて提案するグループが多くあったり，法的な強制力の必要性に言及するグループがあるなど，理論を元に現実の諸課題を解決しようと意欲的に議論する姿が見られた。

第４次では，所得格差が生まれる理論的な説明を聞いた上で，所得格差に対する対策を検討させた。第３次が「理論から導かれる望ましい状況」と「理論どおりに行かない現実」の問題であったのに対して，第４次で扱う内容は「理論的にジレンマの存在が明らにされる」場合にどのような社会的な合意を作るべきか，という問題になっており，議論はかなり難しくなっている。また「所得の再分配制度はどうするべきか，具体的な再分配政策を提案しよう」という問いはやや抽象的であった（注 19）こともあり，提案をまとめるのに時間がかかったり，グループごとの提案の具体性に差が出たりする結果となった。第４次の最後には「問いの構成」の項での構想に従って一旦クラスでの合意を多数決によって決定し，その上で「制度制定後どのような課題（負荷）が残されるか。新たにどんな課題が予想されるか？」を検討させた。本実践では第３次では合意までは行わなかったが，第４次の問いが質的にかなり高度であることを考えると，合意と合意後の課題についての問いは，比較的取り組みやすい第３次のような問題から導入することが望ましいと考えられる。

７．結果と考察

評価は，ワークシート，成果物（投資マニュアル等），学期末試験および自由記述による単元全体に対する感想を用いて行った。

表１　自由記述による感想の分類

記述内容		人数
a 活動に関すること	ロールプレイについて	40
	グループでの議論について	37
	分業ゲームについて	10
b 社会との関わり，意欲に関すること	現実とつながりのある内容だった	55
	役に立つ内容だった	40
	活用したい	17
	考えるのが楽しかった	7
	興味のある内容だった	5
	授業をもとに新たな課題について考えた	7
c 内容や理解に関すること	多様な立場への気づき	34
	理論の意義が分かった	30
	内容が深まった	28
	理解出来た	28
	問題解決の難しさが分かった	19
	投資への関心がたかまった	18
	内容が難しかった	8
d その他		11

高校１年生 205 名，重複あり

自由記述による経済単元全体の感想を分類したものが**表１**である（分類は a, b, c の三つの視点で独立に行っており，記述の仕方によっていずれかのみにカウントされているものも全ての項目でカウントされているものもある。いずれにも該当しなかったものは d その他とした)。自由記述であるため単元全体の中で印象に残ったことを記述していると考えられるが，多かったのはグループ活動に関するものと，現実の社会とのつながりや有用感に関するものであった。グループ活動では特にロールプレイに言及したものが多く，

・グループを作ってロールプレイをすることで，当事者の状況を想像しやすかったです。
・ロールプレイングをすることによって，その立場のことが考えやすくなるなと思った。
・その役になりきって話し合いすると，その立場からしたらそういう捉え方になるのかと考え方の違いができて合意が難しかった。

・思ったよりも普段自分の立場を中心に考えていることがわかり，様々な立場に立って議論することの重要性を感じた。

など，“③多様な立場への理解”をしようとする意欲を高める効果があったことが読みとれるものが多く見られた。また，

・ロールプレイの時，自分が良ければいいといった自己中的な考えが問題の停滞を生むんだろうなと思う。反面，自己中な考えは大変理解できるので，複雑な気持ちになった。

のように，自らをふり返って逡巡する姿を示したものもあった。グループ活動については活動的な授業そのものが楽しいという感想もあったが，

・現実の様々な問題を少しでも解決できるように，グループの人と政策を出し合い，議論したのが楽しかった。
・グループワークで班の人がそれぞれ持つ意見を交流し合う機会が多くて，より授業内容を理解できた。
・ロールプレイでやってみると課題が明らかになって制度の意義などもわかりやすくなりました。

など，活動によって理解しやすくなったり問題解決への意欲が高まったことを述べたものが多かった。ゲームやロールプレイなど導入した活動そのものはこれまでも広く行われてきたものであるが，単元に適切に位置づけることで「公共」の目標を達成することにつながることが明らかとなったと考える。グループ活動に関する記述の次に多かったのが，

・投資・働き方は，これからの私たちにとっても身近で接することも多くなると思うので，学んでおくべきだと思いました。どちらのテーマでも世の中の原理（金利・市場・分業）の裏にある人と人とのつながりが興味深いです。
・自らの将来に大きく関わることを普段とは異なる視点で見ることができて良かった。
・現在の社会の仕組みが少しわかったので，それを活かして生活したいと思った。
・自分たちに大きく関わるような内容でいろんな立場で考えてみることが大切だと思った。

など，有用感や学習したことを活用することへの意欲を示したものであった。単に題材が役に立つというだけではなく，理論を用いて学んだり議論したりしたことに意義を見出した記述となっており，生徒自身が「現実社会の諸課題の解決に向けて，選択・判断の手掛かりとなる考え方や公共的な空間における基本的原理を活用して，事実を基に多面的・多角的に考察し公正に判断」したり「合意形成や社会参画を視野に入れながら構想したことを議論する」（注20）授業に意義を見出していることを示唆したものであると考えられる。「公共」を実りのある科目にするための“目標を意識した工夫と実践”の必要性を再確認させてくれるものであるといえよう。

“①専門諸科学に基づく社会的な「見方･考え方」”を働かせることができたか，という点については，分業ゲームに関わって，

・班の中で実際に分業体験してみて，分業の効率の良さを知ることができました。
・班ごとで切り取れた図形のセットを競うゲームで分業の仕組みはその難しさを実感できました。
・実際に分業してみたり，体験することで問題点を認識することができて面白かったです。

など，活動が理論を理解する助けになるだけでなく理論を現実に適用することの難しさについて考えるきっかけになったことにふれたものがあった。また，

・比較優位のように感覚的な考えとは異なる理論をいくつも学べて楽しかったです。
・社会問題がどうして社会問題になっているのか？比較優位などの経済的視点から論理的に読み解くことができたのでとても面白い授業だった。
・困っている人を助けたり，仕事を苦手とする人を助けたりという一見効率が悪そうなことも理論的に考えると実は合理的だということが新鮮で興味深かった。

のように，理論を用いて社会の問題を読み解くことができたことについて述べたものに加え，

・社会のメカニズムを理解する必要がある。反面，現実との乖離を見極めなければならないと考えさせられた。
・再分配にはいろんな不安要素があって，理論上可能でも人の心情も介入して考えるとうまくいかないということが分かった。

など，理論を用いて問題を読み解く活動を通じて，理論を活かした問題解決の難しさに気付いたり，

・理論を用いて，どのようにして問題を解決していくか考えるのが楽しかった。解決法は考えるほどより良くなると思った。
・分業の仕組みが分かって社会は思ったよりうまく回っているんだなと思った。もっと分業の認識が広がれば，立場が弱い人に対する差別も減るのではないかと思う。

のように，問題解決への関心が高まったりしたことを示す記述もあった。理論や概念などの社会的な「見方・考え方」を働かせることができるようになるこ

とで,「よりよい社会の実現を視野に，現代の諸課題を主体的に解決しようとする態度」(注 21) を高める可能性があることが示唆されたと考える。さらに,

> ・今後の働き方について，新しい制度を作っていかないといけないのだなと思いました。
> ・働き方の問題では制度があるにも関わらず，うまく機能していないなどの課題があることを知りました。将来自分が働くときのことをイメージして，今後も働き方について考えていきたいです。

など，自分ごととして授業後も問題解決に取り組む意欲を示したものも見られた。

“②功利主義，義務論の理解”について今回の授業ではあえて功利主義や義務論という言葉を用いずに「まずはなるべく多くの立場の人を考えてより多くの人が幸福になる選択を考えよう，その上で，誰かに負担が偏ったりしていないかチェックしよう」という働きかけをおこなったが，期末試験では既習内容として授業で扱った格差の問題について次のような問題を出題した。

> **問題**
> 太郎・次郎・花子の議論について，功利主義に基づいた主張をしている人物として最も適当なものを選びなさい。
> 太郎「分業によって大多数の人が豊かになれるなら少数の人の貧しさは仕方ないんじゃないかな。」
> 花子「そんなことないわ，なるべく多くの人が幸福になることをめざすべきよ。」
> 太郎「でも再分配をすれば生産性の高い人の幸福は減るんじゃない？」
> 花子「豊かな人にとっての負担感と，生存に関わるような暮らしをしている人にとっての幸福を比較するなら，再分配をした方が良いんじゃないかな。」
> 次郎「同感，困っている人は助けるべきだよ。」
>
> **結果**
>
> | | |
> |---|---|
> | 花子と回答（正答） | 50.3% |
> | 太郎と回答 | 32.7% |
> | 太郎と花子と回答 | 11.6% |
> | ともに誤答 | 5.5% |

功利主義に基づけば少数の富裕層の負担で多くの貧困層が救われる再分配が支持されるのであるが，これまでの功利主義についての学習にもかかわらず半数弱の生徒は功利主義を単純な数の大小の問題と捉えていることが明らかとなった (注 22)。「功利主義」という言葉が議論の根拠付けに用いられることもある現状をふまえるなら，平易な言葉に置き換えて考えさせることとともに，言葉も含め単元の学習の中で持続的に扱う必要があると考えられる。

“④答えの無い問題に取り組み続ける意欲”に関わっては，次のような問題を出題した。

> **問題**
> 社会の諸課題について検討し合意を目指す場合，すべての人が納得することが難しい中でも合意を作らざるを得ない場合がある一方で，合意をした後も常に取り残された問題が存在すると考えて問題に対処し続けることが重要である。その際，どのようなことに留意する必要があると考えるか，あなたの意見を書きなさい。
>
> **結果**（記述内容を教員が分類）
>
> | | |
> |---|---|
> | 持続した取り組みの必要性 | 26.1% |
> | 多面的な視点の必要性 | 24.1% |
> | 合意の際取り入れなかった少数意見への配慮 | 18.1% |
> | 対処による弊害を防ぐ必要性 | 8.0% |
> | 最も不遇な立場への配慮 | 7.0% |
> | その他 | 16.6% |

問題文の中に「合意をした後も常に取り残された問題が存在すると考えて問題に対処し続けることが重要」と明記しているように，取り組み続ける意欲を問うものではなく，困難な合意に際して生徒が何を重視しているのかを問う意図で出題したものである。

> ・問題がおきてないか常に情報収集し解決に取り組むこと。
> ・合意を最終的なゴールと捉えず問題解決を怠らないこと。
> ・一度作った概形を保ちつつ問題に合わせ細部を変更していくこと。

のように，持続的な取り組みの重要性そのものに言及した生徒や,

> ・取り残された問題は不利を被る人が少数であったり表に出にくい問題である事が多いため見えづらい問題を見ないように消してしまうのでは無く真摯に向き合う必要がある。
> ・合意してない人たちの状況をしっかり理解しそうした人々への援助の手をあげるべきだと思います。
> ・納得してない人の立場でも考えること。

など，多様な立場を想定し多面的な視点の必要性に言及した生徒が多かったのは，合意後の課題について考えさせるなどの授業での活動を反映したものと考えられる。また,

> ・最も不遇な人でも救済を受けられるようにするべき。
> ・絶対的に少数の立場の人もいるため無知のヴェールをかぶって考えることが必要だと思う。

など，既習のロールズの無知のベールの考え方や用語を用いて答えた生徒も一定数いた。また少数なが

ら功利主義や義務論の考え方を用いた意見を答えた生徒もいた。1学期からの社会の課題に取り組む学習を積み重ねながら，学んだことを活用しようとしていることが伺われる。一方で，

・その問題に対処することで逆に他の人がこまらないようにすること。
・残された問題を解決することが更に困る人を増加させる要因にならないように様々な立場で考える。

など，対処による弊害を懸念し合意後の議論に対して消極的な回答も一定数見られた。本実践では，合意の困難ゆえに授業内での合意を避けるのではなく，例え不完全であっても合意を作ることで責任を果たし，結果を継続して引き受けようとする力が，「対立をこえる」ために求められると考えて“④答えの無い問題に取り組み続ける意欲”の育成をめざして授業を構成したが，合意と継続的な課題への対応をどう理解させるか，更なる工夫が必要であると考えられる。

８．成果と課題

本研究の成果は，これまでの先行実践で明らかとなった課題をふまえ，学習指導要領の目標を達成しつ，「対立をこえる」力を育成する新科目「公共」の汎用的な単元モデルを開発したこと，さらに実践と評価を行って，専門諸科学に基づく社会的な「見方・考え方」を位置づけた単元構成モデルの類型や活動場面の導入，問いの構成の効果を明らかにしたことである。課題としては時間数の制約によって単元すべてを実践できなかったことや，答えの無い問題に取り組み続ける意欲を育成する問いの構成への工夫をはじめとした更なる授業改善を進めることがあげられる。また，本研究では自由記述を中心として評価を行ったが，ねらいと整合した精緻な評価方法を確立することも課題である。

成果と課題をもとに，今後も継続して実践研究に取り組み,「対立をこえる」力を持った「生涯にわたって探究を深める未来の創り手」（高等学校学習指導要領の改訂のポイント）の育成に努めたい。

注１：近年は認知神経科学などの研究によって生徒に限らず人間はそのような特性を持っているということが示唆されている。（ターリ・シャーロット，『事実はなぜ人の意見を変えられないのか』，白揚社，2019年等）

注２：例えば，国際紛争を扱う単元で，人権抑圧国への介入を「より大きな被害を防ぐ」と功利主義的な立場から正当化することも，「介入は紛争の拡大を招き犠牲を増やす」と功利主義的な立場から否定することもできる。

注３：これも近年の神経科学と倫理学の学際的研究によって，「人は無意識のうちに判断するシステム１と，時間をかけて論理的に判断するシステム２を併用しており，功利主義的な判断はシステム２によるものであること」などが明らかにされている。生徒が「自分ごと」として受け止めれば受け止めるほど直観（システム１）による判断の影響が大きくなるのは自然なことだということになる。（阿部修士，『意思決定の心理学』，講談社選書メチエ，2017年／ジョシュア・グリーン，『モラル・トライブズ』，岩波書店，2015年等）

注４：例えば，小原友行は「社会科の役割を，社会の変化や課題に対して学習者一人一人が社会的な判断を行い，合理的な社会的行為を選択・決定できるようになるために必要な社会的な見方・考え方を育成することである」ととらえている。（「社会的な見方・考え方を育成する社会科授業論の革新：21世紀の学校教育における社会科の役割」社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究』第10号，1998年，pp. 5 -12）また，吉村功太郎は「それぞれの価値観に基づく異なる主張についての相互批判と相互調整が行われることとなる。それぞれの主張に関する理解が深まり，受容可能な批判の受け入れを通じて個々の主張が変革され，合意できる点が見出されてくることになる，その合意が互いの納得と承認のもとに形成されたものであるならば，それは，各人の主体性を保障しつつ，社会的過程を経たものであるといえる。なぜならば，納得と承認のもとに自己の主張を変革し，その主張が自らの価値観に立脚したものであるのならば，それは主張の基盤となる価値観そのものを自ら主体的に変革したことになるからである。」（「社会的合意形成能力の育成をめざす社会科授業」全国社会科教育学会『社会科研究』第59号，2003年，pp.41-50）と述べている。

注５：例えば経済領域では「職業選択，雇用と労働問題，（中略）経済のグローバル化と相互依存関係の深まり（国際社会における貧困や格差の問題を含む。）などに関わる現実社会の事柄や課題を基に，公正かつ自由な経済活動を行うことを通して資源の効率的な配分が図られること，市場経済システムを機能させたり国民福祉の向上に寄与したりする役割を政府などが担っていること及びより活発な経済活動と個人の尊重を共に成り立たせることが必要であることについて理解すること。」とある。「を基に」以降の理解につながるような理論や概念としては，経済領域であれば中学校指導要領でも例示された「希少性」や「分業と交換」（本実践で扱った「比較優位」も広くは「分業と交換」に含まれよう），「市場」や「金融」などが考えられる。

注６：選択・判断の手掛かりとなる考え方をどう扱うべきかについてはこれまでの実践を記した以下の論文等で報告しているので参照されたい。（阿部哲久，「『対立をこ

える』力の育成をめざす，二重過程理論を導入した公民科の授業開発：同性愛の非犯罪化をめぐる『ハート・デブリン論争』を題材として」『中等教育研究紀要』第64号，広島大学附属中･高等学校，2017年／阿部哲久，「「対立をこえる」力の育成を目指した公民科の授業開発－功利主義（帰結主義）をどう学ばせるか，道徳的直観と論理の葛藤を引き起こす教材の検討－」『中等教育研究紀要』第66号，広島大学附属中・高等学校，2019年）

注7：いわゆるトランスサイエンスな問題である。専門諸科学に答えることが出来ない，ということは専門諸科学が不要であることを意味しないことは重要である。単一の正解を導けないとしても，明らかな誤りの回避のために専門諸科学の担う役割は大きい。科学技術社会論の藤垣裕子は「裁判官」から「証人の一人」へ，と科学者の役割の変化を表現（『科学技術社会論の技法』編 東京大学出版会 2005）している。

注8：注4で引用した吉村は「それぞれの主張に関する理解が深まり，受容可能な批判の受け入れを通じて個々の主張が変革され，合意できる点が見出されてくる」と述べている。

注9：熟考を続けることで議論が自分と同じ意見に収斂するはずであるという感覚を持っていないかということは常に自省が必要であろう。

注10：このような場面ではしばしば可視化されている弱者と可視化されていない弱者が存在することにも留意が必要である。常に多様な立場への眼差しを持ち続けることが求められるだろう。

注11：年間70時間の配分については，内容Aに10時間，内容Bに40～50時間，内容Cに10～20時間程度が想定されている。本実践では，内容Bの経済単元に16～22時間を割り当てる想定となっている。

注12：国立教育政策研究所の『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』，2021年の事例においても，「公共」の単元の最初には単元で扱う課題に対する生徒自身による調査や議論が，単元の最後には個人によるふりかえりの時間が取り入れられている。

注13：事前アンケート（高校1年生3クラス122名対象）を行った結果は以下の通りである。家庭でよく話をするほど関心があり（相関係数0.55），家庭で話をしていないほど危険だととらえる傾向がある（相関係数0.35）という結果であった。

1．投資に関心がある
（とてもある5～まったくない1）
5 21.3%　4 31.1%　3 19.7%　2 17.2%　1 9.8%
2．投資のイメージ（危険5～安全1）
5 13.9%　4 39.3%　3 33.6%　2 10.7%　1 2.5%
3．家で投資について話をすることがある
（よくある5～まったくない1）
5 9.8%　4 13.1%　3 13.1%　2 18%　1 45.9%
4．投資をしてみたい（すでにしている6，
とてもそう思う5～まったくそう思わない1）
6 3.3%
5 18%　4 31.1%　3 17.2%　2 18%　1 12.3%

注14：このような直感の存在については，松尾匡「「経済学的発想」の調査」野口旭編『経済政策形成の研究』ナカニシヤ出版，2007年所収，による。生徒の実態については，阿部哲久「『分業』と『交換』の視点を取り入れた中学校公民的分野の授業開発－社会的包摂のための『比較優位』の教材化の検討－」『中等教育研究紀要』第64号．広島大学附属中・高等学校，2017年，pp.19-34を参照。

注15：本ゲームは野瀬 輝（広島大学大学院）の考案によるものである。

注16：学習指導要領から単元の目標と評価規準を作成する手順は，国立教育政策研究所の『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』，2021年によった。

注17：小単元1の投資に関わる部分は公民教育学会科研費研究プロジェクト「18歳市民力を育成する社会科・公民科の系統的・総合的教育課程編成に関する研究」令和2～4年度（研究課題/領域番号20H01670，代表 唐木清志）の一部として作成したものである。また，小単元2の第2次－2および3は，既発表の前出論文「『分業』と『交換』の支店を取り入れた中学校公民的分野の授業開発－社会的包摂のための『比較優位』の教材科の検討－」の展開を転用している

注18：戸田山和久は，「集団思考」の罠に陥らないためのアイデアの一つとして，教会の聖職者があえて反対派・異分子の役割をする人を選んで議論する「悪魔の代理人」，という方法を紹介している。（『思考の教室』，NHK出版，2020年）

注19：小単元2の第4次は，本校の2021年度教育研究大会で研究授業として公開したが，協議会においても問いが大きすぎたのではないかという指摘をいただいた。合意を目指すのであればより絞り込んだ問いにする方が望ましかったのは確かであろう。

注20：学習指導要領の「公共」の目標（2)「現実社会の諸課題の解決に向けて，選択・判断の手掛かりとなる考え方や公共的な空間における基本的原理を活用して，事実を基に多面的・多角的に考察し公正に判断する力や，合意形成や社会参画を視野に入れながら構想したことを議論する力を養う。」

注21：問題文では花子は幸福の重み付けを行っていることから，誤答した生徒の多くは花子はミル的な功利主義，太郎はベンサム的な功利主義と判断したようである。幸福の重み付けをしなくても功利主義は徹底した再分配に

行き着くということは直感的に理解しにくいようである。年間を通じて繰り返し丁寧に扱っていくことが必要であろう。

注 22：学習指導要領の「公共」の目標（3）「よりよい社会の実現を視野に，現代の諸課題を主体的に解決しようとする態度を養うとともに，多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される，現代社会に生きる人間としての在り方生き方についての自覚や，公共的な空間に生き国民主権を担う公民として，自国を愛し，その平和と繁栄を図ることや，各国が相互に主権を尊重し，各国民が協力し合うことの大切さについての自覚などを深める。」

参考文献（小単元 1）

川西諭，『金融のエッセンス』，有斐閣，2013 年

大手町のランダムウォーカー，『世界一楽しい決算書の読み方』，KADOKAWA，2020 年

阿部彩ほか，『生活保護の経済分析』，東京大学出版会，2008 年

武川正吾，『連帯と承認　グローバル化と個人化の中の福祉国家』，東京大学出版会，2007 年

八田達夫，「所得再分配政策の費用対効果」『会計検査研究 41 号』，会計検査院，2010 年

参考文献（小単元 2）

N・グレゴリー・マンキュー，『マンキュー経済学　第 2 版　ミクロ編』，東洋経済新報社，2005 年

松尾匡，「『経済学的発想』と『反経済学的発想』の政策論－マルクス経済学から－」，野口旭編，『経済政策形成の研究』，ナカニシヤ出版，2007 年

川越敏司，『現代経済学のエッセンス－初歩から最新理論まで－』，河出ブックス，2013 年

P・R・クルーグマン，『クルーグマンの国際経済学　理論と政策　上　貿易編』，ピアソン，2010 年

飯田泰之,『飯田のミクロ－新しい経済学の教科書－』，光文社新書，2012 年

菅原晃，『中高の教科書でわかる経済学　ミクロ篇』，河出書房新社，2017 年

猪俣哲史，『グローバル・バリューチェーン』，日本経済新聞出版，2019 年

黒崎卓，栗田匡相，『ストーリーで学ぶ開発経済学』，有斐閣素トゥディア，2016 年

伊藤元重，『どうなる世界経済～入門国際経済学～』，光文社新書，2016 年

Overcoming Conflicts V

Tetsuhisa ABE

Abstract:

In this study, we have developed and implemented a generic unit model for a new subject, "Public," that aims to develop the ability to overcome conflicts. Although it the new subject "Public" is effective in fostering effectively advances the ability to overcome conflict, but textbooks alone are inadequate, and teachers' ingenuity is essential. The following three points were emphasized in the development of the program: a structure that allows students to think from a social science perspective, appropriate integration of activities, and a willingness to continue working on the task as agreed. As a result of practice, these three points were found to be effective.